

# 大学生ボランティアの地域日本語教室活動に対する PAC 分析調査

高梨 宏子

## 要 旨

現在増加する外国人の子ども達に対してあらゆる面から支援がなされている。特に地域での支援は多様な支援者が携わりそれぞれに特色のある支援を行っている。このような地域日本語教室での活動は日本語教育を専攻する大学生にとってどのような経験であるのかを明らかにする。本研究では地域日本語教室で継続的に活動する大学生ボランティアを対象に PAC 分析を実施し、ボランティアでの経験に対してどのような意識構造が構築されているのかを分析した。

その結果、大学生ボランティアの意識には子どもに対するものと自分自身に関するものが存在し、子どもとの関わりの中で自身を振り返りながら活動していることが分かった。様々な困難や不安を抱きながらも、それらを乗り越える取り組みを続けていた。また、大学では理論を学び、その実践の場として地域日本語教室を位置づけており、どちらも必要であり相互補完的関係であると捉えていることが見られた。

【キーワード】 外国人の子ども、ボランティア、地域日本語教室、PAC 分析

## 1. 研究背景

### 1.1 外国人の子どもを取り巻く環境

現在、グローバル化する時代の中で人々の国境を越えた移動が盛んになっている。日本においても定住する外国人が増加していた。2011 年に発生した東日本大震災後、若干の減少はあったものの、定住外国人は日本で生活を続けている。定住している外国人の子ども(以下、子どもとする)達の中には来日前に日本語を学習していない者もあり、学校へ通いながら日本語を学ばなければならぬ。希望をすれば日本人と同等の教育を受けられることになるが、それは「日本人と同等に扱う」という基本原則を示されている(太田 2000)のであって、外国人の子どもたちの十全な学習環境を保障するものではない。日本語を母語としない子どもが日本語のみの教室環境で学習を進めることは非常に難しく、外国人の子ども達への言語学習や年齢に適切な教科学習などの支援の充実が必要である。学校現場においては、取り出し授業や入り込み指導等の取り組みがすすめられているが、実際は加配教員が割り当てられている学校は少数で、加配教員が割り当てられない少人数在籍校では担任や教科担当が対応に当たるか、ボランティアが指導協力者として当たっているところもある(石井 2000)。また、ボランティアの活動の場は学校だけではなく、地域でも展開されている。積極

的にボランティアが子ども達の教育の一端を担う構図が構築されつつあり、ボランティアの存在も子どもの教育・支援における担い手のひとつであるということが分かる。

### 1.2 地域における日本語教室と支援

では、ボランティアによる地域での支援にはどのようなものがあるのか。外国人の子ども達の支援を考える場合、日本語を教えるだけにはとどまらず、教科学習のサポート、心理ケアや居場所づくりなど多岐にわたる支援が必要であろう。坪谷(2005)は外国人の子どものための地域学習室をいくつかのタイプに分類した。日本語指導型、教科学習サポート型、進学サポート型、居場所づくり型、不就学者サポート型、母語教育型などがあるとしている。一つの機能のみではなく、同時に複数の目標をもち、子どものニーズや学習環境、抱える問題などに対応せながら活動している教室が多い。また、外国人の子ども達にとって将来像が不明確になりがちな中、地域学習室は子どもと日本社会との接点を拡大する機能を持ち合わせている。地域の年配者、同じ国出身の若者、自分の親と同じような経験をしてきた通訳者、地域外から通ってくれるボランティアとの関わりもこうした教室でこそ得ることができると坪谷は指摘している。様々な背景を持ったボランティアが外国人の子どもに関わり、彼ら彼女らの学習や生活

を豊かにしていく可能性があることが分かる。こうした支援者の中には、ボランティアとして活動する大学生もいる。例えば、子どもと母語と同じにする留学生が母語を使いながら学習支援を行うような実践がある(宇津木 2008)。また、日本語教員養成課程を履修する日本人大学生の教育実習として日本語ボランティアに参加する事例もある(土屋 2005)。一年間の実習を通じた実習生たちの学びは多岐にわたり、また卒業後の進路にも影響を与えていることが報告されている。ボランティア活動の場に大学生が関わることが子どもや学校現場、地域社会への貢献があることは推測でき、坪谷の指摘する日本社会との接点という観点からも担う役割があると考えられる。

日本人大学生たちは、今後、多文化共生社会の一員として地域やコミュニティで外国人の子どもとともに生きていく存在になる。日本語教育を専攻する大学生たちの中には教員や日本語教師になり外国人の子どもに關係のある職業に就くものもいるだろう。多文化共生社会を牽引していく大学生が地域日本語教室で活動を続けることには意義があると考える。

同時に日本人大学生にとってボランティア活動はどのような意味があるのだろうか。将来、外国人の子ども達とともに社会を築く大学生の意識を見ることにより、ボランティアによる支援活動への示唆が与えられると考える。よって、本研究では、ボランティアで活動する大学生に注目する。特に、日本語教育を専攻としている日本人を対象とする。

## 2. 先行研究

ボランティアを対象にした研究については、外国人の子どもを対象にした活動ではないが、松尾(2008)の研究がある。松尾は、成人学習者を対象とした日本語教室での活動に注目し、ボランティアが支援を継続していくプロセスについて、インタビューデータを対象に M-GTA を用いて分析している。その結果、活動を始め、困難を感じながらも、支援を通じての気付きから支援方法を模索し、支援し支援される関係を形成していくことが分かった。また、一連の活動を通じて自己の拡充感を得ていることが分かった。自身が人の役に立っている、人との結びつきから社会との繋がりを持てるといった感覚が自己拡充感へと結びつくことが窺える。また、岡崎(2008)は、広がりを見せるボランティア活動において、ボランティアは自己実現と生きがいを見出すと

いう地平を達成しているとしていると述べている。松尾の研究対象となっているボランティアはほとんどが定年退職者や子育てがひと段落した主婦などである。様々な人生経験を経て人生の節目を乗り越えたボランティアがもう一度活躍の場を得るからこそ、自己実現の達成が強調されるのかもしれない。

では、大学生の場合はどうだろうか。先述通り、日本語教員養成課程において教育実習として日本語ボランティアの活動を行う事例のほかに、大学における日本語教育の講義やゼミの中でのボランティア活動もある(水野・澤崎 2006 など)。その中で、大学生ボランティアの力も特色があり、外国人の子ども達の支援において意義のあるものであることが報告されてきている。

支援活動をした大学生に焦点を当てた研究では、水野(2007)がある。水野は自分が担当する「日本語教授法」の講義を履修している学生たちのボランティア活動を対象としている。学生たちにアンケートを行い、日本語教育や学校教育について考えが変わったと感じていたという結果が示されたが、そのとらえ方は学生によって様々であったことも分かった。また、大学生によるボランティア活動の学生への教育効果は、新しい知識の獲得、自身の変化と成長、将来の目標の決定、仲間との連帯感、楽しさ・喜び・充実感、新たな認識の獲得という 6 つの示唆が得られた。学生たちは高度な知見や教育的力量を有さないが、様々な工夫や仲間との協働により困難を少しづつ乗り越え、子どもと共に成長する姿が見られた。藤本・江成(2007)でも、大学内で立ち上げたボランティア団体で活動するボランティアに対しアンケート調査を行っている。「毎週欠かさず参加してくれる生徒がいることが嬉しかった」と子どもの様子から満足感を得る学生が多くいた。また、指導の上ではそれぞれの状況に合わせて工夫していることが明らかとなっている。また、子どもとの関わりの中で異文化交流の成果も取り上げられており、実践をきっかけに主体的に学ぼうとする姿勢が見られた。

この二つの研究から、活動の中でボランティアが成長していくという様子が確認できる。また、岡崎(2008)が指摘するように、大学生においてもボランティア活動は自己実現の場でもあることが言えよう。しかし、水野(2007)では、各学生が様々なとらえ方をしていることが示されたが、その個々のとらえ方がどのような様相であったかは示されていない。

どのような実践をもとに、個人がボランティアでの体験をどう捉えているのかということを明らかにする必要がある。また、体験を描き出すことから、地域の日本語教室が支援をする者にとってどのような役割を持ちうるのかを検討できると考える。本研究では、先行研究の結果と同様に日本語教育を専攻する大学生を対象したい。よって、この研究では、日本語教育を専攻する大学生にとってボランティアの体験はどのようなものなのかを検討する。

### 3. 研究目的

以上の先行研究より、外国人の子どもを対象とした支援活動を大学生ボランティアが行うことの意義があることが示された。本研究においても大学生が日本語ボランティアとして活動する意義を検討することとする。日本語教育専攻の日本人大学生が地域の日本語教室の中で活動する場合に注目し、支援の体験はどのように捉えられるのかを明らかにすることを目的とする。個人の体験が内面においてどのような構造となるのかを、ある一人の日本人大学生の事例を通して考察していく。

### 4. 研究対象

都内にあるボランティア教室をフィールドとする。このボランティアは都内に7教室あり、そのうちの1教室であるN教室で活動する日本人大学生Mとする。N教室は外国に背景のある子ども達に対し主に教科学習の補習や日本語学習の支援をおこなうことを目的としている。公民館を使用し、週に1回の教室を開催している。10名ほどの子どもが教室へ来ている。ボランティアは大学生、短大生、専門学校生、社会人が20名ほど所属し活動している。また所属しているボランティアの専攻は日本語教育に限らず、文系・理系問わず多種多様の専攻である。

今回対象としたMは約1年半活動を続けていている。Mは大学で日本語教育を専攻としている。大学では日本語学・日本文学を1年次で主に学び、2年次以降は日本語教育学の授業を中心に履修している。大学の中で年少者日本語教育に関する授業はなく、概論の授業の中で触れたことがある程度だった。Mが入会したのは日本語教育の授業を履修し始めた2年次だった。入会した理由は外国人の子どもに興味があったからだった。本人の希望もあり、主に幼稚園や小学生の子どもたちの支援を行ってき

た。日本語学習支援だけではなく、教科学習も支援することもあった。また、担当する子どもの年齢に合わせた支援を行っており、教科学習だけではなくお絵かきやトランプなどの遊びの時間も支援時間中に取り入れていた。筆者とMはともに活動するボランティアである。教室内の子どもの支援について互いに相談し合うこともあった。

### 5. 研究方法

本研究では内藤(1997)によって開発されたPAC分析を援用した。PAC分析のPACとはPersonal Attitude Constructの略であり、個人別態度構造と訳される。内藤によると、この分析法は「①当該テーマに関する自由連想(アクセス)、②連想項目間の類似度評定、③類似度距離行列によるクラスター分析、④被験者によるクラスター構造の解釈やイメージの報告、⑤実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を測定・分析する方法」である。この分析法で用いられている「自由連想」という方法は、これまでしばしば用いられてきた研究者のスキーマに基づく変数を用いた項目に沿って調査協力者の態度やイメージを捉えようとするではなく、調査協力者自身のスキーマによって出された項目を採用することによって、調査協力者の主観的態度構造を「全体的・総合的」に捉え、調査協力者の個別性、独自性を生かすことを可能にする。また、「クラスター分析」によるデンドログラムとして項目間の関係を可視化することにより、研究者と調査協力者の双方が、ある程度客観的に個人の態度構造を分析することができる。

調査は以下の手順で行なう。なお、調査では、データの入力には土田氏が開発した「PAC分析支援ツール」<sup>1</sup>を用いてコンピューター上で行なう。

- (1) 調査協力者に、刺激文として以下の文章の書かれた紙を示し、口頭で読み上げ教示する。

【刺激文】「日頃の日本語ボランティアとしての自分を振り返ってお答えください。子どもに日本語や教科などをサポートするボランティアの中で活動を行うことは、あなたにとってどのような体験ですか。その時の状態、気持ち、感じはどのようなものですか。頭に思い浮かんできたイメージや言葉を、思い浮かんだ順に入力して下さい。」

- (2) このテーマに対して連想する全ての項目を自由に挙げてもらった後、内容の肯定・否定に関わりなく、調査協力者にとって重要と思われる順に番号をふる。
- (3) 二つの連想項目が言葉の意味ではなくイメージとして直感的に互いにどの程度近いかを 7 段階尺度(近いと思えば 7、遠いと思えば 0 にカーソルを移動)で調査協力者に評定してもらう。全ての連想項目間の評定を総当たりで行なう。
- (4) 項目間の評定結果をクラスター分析(ウォード法)で処理し、デンドログラム(樹状図)を得る。この処理には SPSS を使用した。
- (5) このデンドログラムをもとに、調査協力者に對しインタビューを行なった。インタビューではまず、デンドログラム上のクラスターを一つ一つ取り上げ、いくつつかの連想項目からなるクラスターに對してどんなイメージが浮かぶかを質問しながら、そのイメージをもとに、クラスターの命名を得た。次にクラスター同士の関係、最後に全体的にどんなイメージかを質問する。

インタビューは調査協力者の了承のうえ、IC レコーダーに録音し、その後全て文字化する。最後にデンドログラムとインタビュー結果をもとに研究者による総合的解釈を行う。

## 6. 結果

PAC 分析を行った結果、図 1 のようなデンドログラムを得た。全部で 14 の項目が提示された。プラスイメージが 7、マイナスイメージが 5、どちらでもない中立が 2 あった。プラスとマイナス、中立が混在している状態である。ボランティア M はデンドログラムを 7 のクラスターに分類した。

M が行った解釈を枠内に記述する。「」は項目名で、【】は M が命名したタイトルである。

子どもに對しての接し方をクラスター1と2で取り上げている。クラスター1は、「子どもが日本語で何かを伝えようとしてくことに頭をフル回転させる」「子どもの不安を軽減してあげたい」という2つの項目から成り立つとし、【向き合い方】というタイトルを付けている。

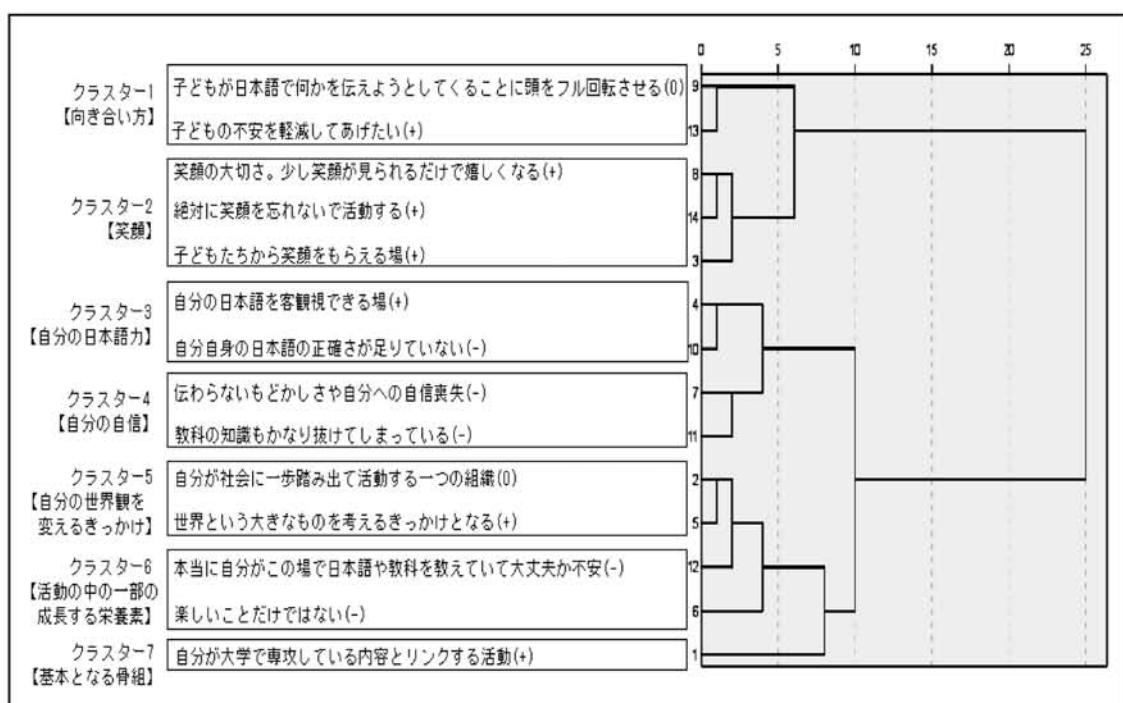


図 1 M のデンドログラム

### 語り 1

日本語で子どもに話しかけて、その子が全然分かっていないかったときに、なんか、「あ、私、答えられない。日本語分からぬから答えられない。」っていうような不安が子どもたちがあると思います。私が「こうなの？」って聞いて、その言っている意味が分からなくて黙っちゃうって。黙っちゃうことって子どもからしたら「あ、私、答えられない。」で、不安ってなってるのかなって思った時があって。そういうときに、なんか・・・リラックスさせてあげるというか。「大丈夫だよ、大丈夫だよ」って。「難しいよね。」っていうような。(子どもの不安って具体的にどんなこと？)

一つは勉強ですかね。学校での勉強が分からなっていいう。N 教室で子ども見ても「あ、ここ全然理解できないんだな」とか。それって絶対、先生が日本語で喋っていたら、細かく説明してくれるわけでもないですし、N 教室で細々やっていても難しいのに、学校でバッて言われたら、やる気も失せちゃうと思うし。でも、中学生だったら受験どうしようとか親が心配してて、そのプレッシャーもっていう不安も少なからずあるんじゃないかなって。中学生には受験の不安もあって。そういう勉強の不安っていう。ちょっとでも「あ、これできたね。大丈夫だよ。」「この問題できたじゃん！」って言うように。

緊張してしまったり学習面で困難を抱えている子どもを励ましたりリラックスさせてあげることを目指しながら、同時に、子どもの言葉を懸命に聞き取ろうとしている。子どもの気持ちを汲み取りながら活動していることが分かる。子どもの不安とは何を指すかという問い合わせに対して、「学校の勉強」と述べ、M が見てきた子ども達の様子を語っている。学校の授業についていけない様子、また中学生の進路の問題などが挙げられている。心理面でのケアも重視しているのは、こういった子ども達の様々な困難を感じ取っているからだと考えられる。そのような子ども達と接する中で、学校でのかれらの様子を想像したり、勉強に対する不安や将来へのプレッシャーにも気づいたりしている。

クラスター2 は、「笑顔の大切さ。少し笑顔が見られるだけで嬉しくなる」から「子どもたちから笑顔をもらえる場」で、すべての項目に笑顔という言葉が使われているように【笑顔】と命名している。

### 語り 2

N 教室やるうえで、なんか、怖い顔とかあんまりしたくなくなって思ってて。とりあえず、笑っていようっていうのがあって。自分も笑っていれば、子ども達も笑ってくれるし。緊張しちゃう子が多いんですけど、それでも、最近笑ってくれることが多くなったっていう。普段の生活でも、N 教室に限らず、そうしていようと思っていて。(笑顔ということは)本当に、モットーなんだと思います。N 教室に限らないけど、N 教室でももちろん笑顔が大事だと思って。

普段の生活でも笑顔でいることを大事にしていると語られているが、N 教室の中でも子どもに対して笑顔を見せたいという思いがあることが読み取れる。緊張してしまう子どもにも M 自身が笑顔でいれば、子どもも笑顔を見てくれるようになったという感覚が「嬉しくなる」という項目にも挙げられており、成功体験のように語られている。N 教室での子どもと関わり、自身が笑顔でいることにより子どもが変容していく体験を経て、「笑顔でいること」が M のモットーであるということがこの語りの中で確かめられている。

クラスター3 では、「自分の日本語を客観視できる場」「自分自身の日本語の正確さが足りていなさい」で、自身の日本語についての項目が続いた。タイトルは【自分の日本語力】であるとしている。

### 語り 3

N 教室やってみて、自分の話す日本語もそうですけど、結構早口だったなって気付いたりして。これは日本語っていうか、これはもう話し方なのかもしれないんですけど。あとは、使い方に気を遣うようになったりとか。

あと自分が日本語教育専攻していて、日本語っていうのを、私たちは当たり前に喋ってますけど、学習者からしたら日本語って複雑だなって思って。大学の講義で「学習者はこういうのが難しい」みたいなことを(勉強した)。ちゃんとした日本語を使いこなせるようになりたいって。日本語っていうのを結構メインで大学生活で勉強していく、日本語の文法とかもやったんですけど。いつも、こう当たり前に喋つてたけど、何ていうんですかね・・・「こういう言葉が嬉しい日本語なんだ。」っていうことが分かって。言い方換えるだけで、「ああ、分かった。」って子どもが言ってくれたりして。「こういうのが分かり易いんだな」って。

自分の話す日本語がどのような言葉になっていくのかを客観視していると述べている。これはやや反省的に自身の日本語を振り返っている。自分の日本語については子どもと接する中で得た気づきであることが分かるが、大学での学びも影響していることが語られていた。M は大学で履修している日本語教育学に関する講義で、日本語学習者にとっての日本語文法について学んだという出来事に触れている。その講義の中で学んだことを実際に N 教室の活動で活かしながら経験的に理解していた事例である。大学で学んだ文法知識を実践でもいかしながら、その内容を理解しているようだ。大学での学びと N 教室の実践がつながりをもって捉えられている。

クラスター4 は「伝わらないもどかしさや自分への自信喪失」「教科の知識もかなり抜けてしまって

いる」の二つのマイナスの項目である。

#### 語り 4

自信ないですね。なくなります。たまに。(子どもが)算数とか理科とか持つて来たり。小学生のも難しいですよね。以前、理科を持ってきた子がいて。電圧とかオウムの法則とか、そんなのあったなーって。高校受験はしてるんですけど、結構抜けてるなって思うんです。他のボランティアは、結構なんか、数学できたり、社会とかもバッタリ教えられて。教室全体見て、みんなすごいなーって。(支援をする子どもがいない日に)教室でいろんな人の(支援を見たりしたんですけど、「すごい!」って思って。「こんな知識あるんだ!」って思って。「私が聞かれたら答えられないや」っていうのもあって。難しい言葉を言い直すとき、(他のボランティアが説明した言葉を聞いて)「その言い方、分かり易い!」とか。

このクラスターを【自分の自信】と命名しているが、これは教科学習の支援をしているときに自信がなくなるときがあるということを表しているクラスターである。外国人の子どもの教育・支援では子どもたちが教科学習をいかにすすめられるかということが課題となるが、支援をするボランティアにあってもその教科学習支援をどのようにすすめるかは課題になることが M の語りから分かる。M のように高校受験、大学受験を経た者でも、その教科を専門としていなければ教科の知識をとっさに思い出すのは難しい。また、他のボランティアの支援に关心を持って観察することもあったということが語りから分かる。N 教室では、大学も専攻も異なる者同士の中での活動となる。そういう環境の中、ボランティアはそれぞれの得意分野をいかしながら支援を行う。たとえば、英語圏からの帰国子女であるボランティアが英語を使って支援を行ったり、理系の専攻をしているボランティアが理科や数学の知識をいかしながら支援を行ったりすることがある。そういう様子を見て、「こんな知識あるんだ!」というボランティア個人に対する発見もありながら、「その言い方、分かり易い!」という発言にあるように支援の内容に対する気づきも得ていた。自信がなくなるような感覚もある一方で、M は仲間であるボランティアたちのそれぞれの能力や知識に刺激を受けつつ支援の仕方に興味を持って見ていた様子がこのクラスターを構成している。

次のクラスターでは、N 教室での活動が世界観を変えるきっかけになったとしている。クラスター5

【自分の世界観を変えるきっかけ】では、「自分が社会に一步踏み出て活動する一つの組織」「世界と

いう大きなものを考えるきっかけとなる」の 2 つの項目が挙げられていた。

#### 語り 5

なんか、大学・・・高校生のときとか勉強と部活だけして、バイトとかもできないし。自分から積極的に行く方じやないんですよね。東京にポンと出てきて、ここから先は自分で決めていかないといけないって言うのが、自分の中であって。大学生になつたし、せっかく東京に来たしつていうのがあって。友達と踏み込んだっていうのが、N 教室だったんですね。で、いろんな大学の人とも知り合って、そういう子ども達との勉強のサポートとかもしてみて、なんかこういう人たちもいるんだなって。子ども達にしてもそうです。うーん。いろんな人がいるなあっていうのが。

最初、日本語教育の学科に入ろうと思ったのが、「外国人たちが日本のサブカルチャーが好きで日本語を学んでいる人が増えています」っていうニュースをたまたま見たのがきっかけで、楽しそうだなって思って。で、実際、N 教室に来たら、そんな・・・学びたくて学んでいるっていう訳じゃない子もいるじゃないですか。仕方なく、親の都合でっていう。「そういう風な世界なんだな、今」っていう。そう考えたのがあります。学びたくて学んでいる人だけじゃなくて、いろいろな理由で日本に来なきゃいけなくてっていうのもあって。「あれ? 難民ってなんだろう?」とか。「ビザって?」て。(活動する前は)考えた事もなかったです。

大学生である現在、高校生までの環境とは違うということを認識している。N 教室を通して M は様々な人と出会うことになる。出身国、母語、年齢などが多様である子どもはもちろんであるが、共に支援を行うボランティアについても関心をもっていた。N 教室は様々な大学等に通う学生が支援に携わっている。M は単に人間関係が広がったというだけではなく、価値観や背景などが個々に異なる者との関わることとして取り上げている。また、N 教室に入会するまでは「日本語学習者は日本語を学びたい人」と捉えていた M だが、N 教室で活動し「日本語学習者が日本語を学びたい人ではない」ことに気付く。家庭の事情などで仕方なく学習しなければならない子どもに支援をしていくことにより、学習者観に広がりを得ていると推測される。また、学習に対する意識だけではなく、外国人に関わるさまざまな問題を知るようになった。「難民」や「ビザ」など、日本人が普段の生活ではなかなか触れる機会のない問題を知ったと語っている。このような問題も M のいう「世界を知る」きっかけになっている。

クラスター6 では、マイナスの項目が 2 つあり、「本当に自分がこの場で日本語や教科を教えていて大丈夫か不安」「楽しいことだけではない」の 2 つをクラスターに含まれると考えた。命名は【活動の

中の一部の成長する栄養素】である。

#### 語り6

楽しいことだけではないっていうのは、ボランティアとの問題もあるし・・・。あと、ちゃんと教えることができなくて、へこむっていうのも楽しくはないなって。漢字の意味とか考えたことないなと思って。「この漢字の意味は?」って。語学を学んだときって、ルールがあった方がいいじゃないですか。変化のルールとか。「このときはこうなるんだよ」っていう風にいくときもあれば、そういう風にいかないときもあるじゃないですか。特別な場合とか。そういう特別が多いと子どもがパンクしちゃいますよね。そういうのをちゃんと説明してあげられなくて。

クラスター5 にあるように人と関わることによって「世界観を変えた」M であるが、他のボランティアとの関係にトラブルが起きることもあった。それが「楽しいことばかりではない」のうちの一つである。もう一つは、M 自身に関する内容である。支援をしているとうまく教えられないという感覚を覚える。それを表す項目が「本当に自分がこの場で日本語や教科を教えていて大丈夫か不安」という不安に繋がっている。これらの二つの項目をまとめて【活動の中の一部の成長する栄養素】と名付けられている。命名をする際、M は「不安に思って考えていることも自分の中の一部というか、成長の栄養素というか。考えなきや何も始まらないというか。」と語っていた。活動の中には困難な出来事や不安があることを認めながらも、それらは自己の一部でありまた栄養素になるものだという認識を示している。また、「考えなければ何も始まらない」と考えている。不安や困難な状況に対して考えることで成長していくことができると捉えているのが分かる。困難や不安は成長するために必要なものであり、成長を促しているものと結びつけていることが推測される。

最後のクラスター7 は、「自分が大学で専攻している内容とリンクする活動」の1つだけであり、【基本となる骨組】をタイトルにしていた。M の意識の中心には、大学で学んでいることが関わっている。

#### 語り7

勉強だけで学んでいても絶対身につかないっていうのがあって。100%リンクするっていうものではないけど、日本語を教えてるっていうよりも教科を教えていることが多いので。

でも、自分が選んだ専攻の中でN 教室に会って、こういう活動で色々な経験を日本語教育を軸として日本語教育っていう骨組みがあって、それにお肉がついている。日本語教育っていうのにN 教室っていう活動がくっついている。

自身の興味関心で選んだ専攻の講義の中で N 教室を知り、講義の内容と N 教室での実践がリンクしていることを感じている。M が大学で学んでいることは成人学習者を対象にした日本語教育である。しかし、N 教室では子どもを対象としているため、大学で学ぶことがすべて反映されないと考えられる。成人学習者を対象とした日本語教育の枠組みだけをもって子ども達の支援を考えることは難しく、子ども達の支援は様々な背景を考えなければならないことが分かる。しかし、M は大学での学びと N 教室での実践を結びつけて考えている。そのことと関連して、M は「勉強だけで学んでいても絶対身につかない」という発言をしており、これは大学の勉強だけでは身につかないものがあると解釈できる。大学で日本語教育について学ぶ一方で、N 教室の中では子どもへの支援の中で子どもと向き合い、経験したことで得たものがあるということになる。それらを踏まえて、語りの中で骨と肉の関係で喻えている。M は大学での学びを中心とし、N 教室での実践が骨であるとしている。この表現は大学の学びと N 教室の実践がつながった存在であることを示すとともに、そのつながりは「勉強だけで身につかない」大学の学びを獲得することを助ける働きも担っていると考えられる。

その関係を「基本」と称していることから、M にとっては大学と N 教室は重要なものであるという認識が窺える。

## 7. 考察と今後の課題

M はクラスター1【活動の上の向き合い方】では子どもの表情や背景を受け止めながら、どのように接するか、どのような声をかけるのか考えながら支援をしている様子を語っていた。また、クラスター2【笑顔】については、「子どもたちの前では笑顔でいる」という活動時のモットーも語られていた。この二つのクラスターは接近していることからも、子どもが不安そうにしている様子を見て、笑顔でいるようにと思うようになったと推測される。

子どもへの支援の中でどのような関わりをしているのかが項目として挙げられている。だが、M の意識は子どもに関わることだけではなかった。クラスター3 から 7 にかけては、子どもとの関わり、他会員と共にする活動の中から捉えられた M 自身に関わる項目が挙げられていた。

たとえば、クラスター3では【自分の日本語力】をふり返ることと同時に大学で「学習者にとっての日本語」について学んだことを実際の支援に取り込んでいる様子が述べられている。Mは大学で日本語教育を学びながら、N教室での活動を続けている。大学で体系的に学んでいる理論や知識を得て、N教室ではその知を実践している。大学とN教室二つの場を往還するような取り組みが行われていることになる。

クラスター4【自分の自信】がなくなることとして教科学習支援を取り上げているが、仲間の支援を観察し、気付きを得ている様子が見られた。このことを可能にしていたのは、多様な背景を持ち、異なる専門をもったボランティアが共に活動している環境であると考えられる。

また、【自分の世界観を変えるきっかけ】や【活動の中の一部の成長する栄養素】が活動の中にあり、M自身の自己成長を促している。こういった実際の支援からうまれた意識が語られ、それらをまとめる形でクラスター7【基本となる骨組】がある。この中に「勉強だけで学んでいても絶対身につかない」という語りがあった。「勉強」つまり大学での学びだけでその知識内容を理解しようとするには難しいということが分かる。大学で学ぶ専門的知識を獲得していくうとするにはN教室での実践が助ける働きをしている。N教室での活動は大学で得た知識を理解することを促していると思われる。

また、ここの語りで自身の専攻である日本語教育は骨、N教室は肉という喻えがあった。動物の身体から骨と肉の関係を考えると、骨あるいは肉はそれだけでは機能を果たすことはできないが、双方が存在するからこそ、身体を動かすことができその機能を果たすことができる。Mにとって日本語教育というひとつの学問とN教室という実践を切り離すことができないものということが分かる。いわば相互補完的な関係であると捉えられる。

以上から、クラスター1と2は子どもと接するときにに関する意識が主な内容であり、クラスター3から7においてはM自身に向かった意識である。構造からみると、Mの意識を構成している要素は、子どもに対することと、自分自身へ向かうことの二つがあるとみられる。クラスター1及び2【向き合い方】【笑顔】では子どもとどのように関わっているのかが述べられていた。他のクラスターでは自己

認識の視点があったと考えられる。【自分の日本語力】への不安や【自分の自信】がないということを反省的にふり返っている。子ども達やボランティア仲間から【自分の世界観を変えるきっかけ】を得、不安や困難を【活動の中の一部の成長する栄養素】として捉えている。【基本となる骨組】ではMにとって専攻である日本語教育とN教室での活動を捉え直している。

子どもに対すること、そして自己認識の二つの意識が組み合わさることで、Mの体験として語られる。支援対象である子どもと関わりながら、支援者本人の自己を捉える観点が必要になるということになる。ボランティアに参加したことが自身のことを捉えていく機会にもなっている。

本研究では一人の大学生ボランティアを対象に、ボランティアでの活動がどのようなものを個に注目しながら描くことを目指した。水野(2007)の研究結果と同様に、Mも支援の中で工夫し、困難を少しづつ乗り越えようと取り組む姿勢が見られた。このような姿勢は岡崎(2008)の述べる自己実現と共通する。岡崎は、日本語ボランティアは他人から感謝され、役に立っているという感情が得られることによって自尊感情により影響を及ぼし、日本語を教える技術に習熟することに自己実現と自己成長を見出しているとしている。Mも支援を行う中で困難を乗り越えながら取り組んでいたことから、自己実現をかなえていた事例と考えられるかもしれない。同時に、Mは実践の中で知を得て、大学での学びとつなげながら深めていった。このことはMが大学生であり、成人ボランティアとは多少異なる背景でボランティア活動を行っていたことが要因としてあるだろう。

本研究で個に注目した分析を行うことにより、個人の経験とその内実をみることができた。日本語教育専攻の大学生が地域の中でボランティアとして活動することの意義があると考えられる。まず、教室の中で実際に子どもと接する事で外国人の子どもたちが置かれている状況を知ることになる。Mは、目の前の子ども達と関わることで、日本語学習支援の他に、励まし寄り添うなど心理面へのサポートにも取り組むようになっていた。子どもたちへの支援が言語学習支援だけではないということを認識するようになる。さらに、大学で学びながら、実践に取り組むという点である。大学での専門的知識が独立

するのではなく、実践の中でいかされ、そのことで大学・地域日本語教室双方の場での学びが深まる。また、仲間であるボランティア達との関係にも注目したい。M が活動する N 教室のボランティアは全員が日本語教育専攻というわけではない。それぞれに多様な背景を持ち、異なる分野を専攻する大学生が共に活動している中で、それぞれの得意な分野をいかしながら支援をすすめている。M も【自分の自信】のクラスターにおいて、ボランティア仲間の支援の様子を見て、気付きを得ている様子が語られていた。日本語教育を専攻する者だけが外国人の子どもの支援にかかわるのではなく、他の専攻をする者との協働の中で刺激を得ながら子ども達の支援について考えていく事ができる。専門性を持った日本語教師にとっても、現在、広く展開している地域日本語教室に自分がいかに関わるかを探求する機会になりうるのではないだろうか。こうした地域日本語教室は、大学での日本語教育に関する学びを展開させることのできる機能がある存在だと考えられる。

今回は日本語教育を専攻する大学生が地域の支援教室でどのような体験をしているのかに注目した。今後は日本語教育だけではなく、教員を目指す者やそのほかの専攻で学びながら支援活動に参加している大学生を対象とした調査を行う必要がある。多様な背景を持つ大学生を対象にした研究を積み重ねることで、地域の日本語教室において大学生が関わることの意義と日本語ボランティア活動が大学生にどのような影響を与えるのかを考察したい。

#### 注

1. 金沢工業大学の土田義郎氏が開発した「PAC 分析支援

ツール」を使用した。

<http://wwwr.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm>(2012年4月取得)

#### 参照文献

- 石井恵理子(2000)「外国人児童生徒に対する教育の充実に向けた教員研修の課題」『教育と情報』509,8-13  
宇津木奈美子(2008)「子どもの母語を活用した学習支援における母語話者支援者の意識変容のプロセス」『人間文化創成科学論叢』10,85-94  
太田晴雄(2000)『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院  
岡崎眸(2008)「日本語ボランティア活動を通じた民主主義の活性化—外国人と日本人双方の「自己実現」に向けてー」『日本語教育』138,14-23  
土屋千尋(2005)『つたえあう日本語教育実習—外国人集住地域でのこころみ』明石書店  
坪谷美欧子(2005)「地域で学習をサポートする」『外国人の子どもと日本の教育』東京大学出版  
内藤哲雄(1997)『PAC 分析実施法入門：「個」を科学する新技术への招待』ナカニシヤ出版  
藤本久司・江成幸(2007)「外国出身中学生への学習支援活動：大学生ボランティアを中心とした試み」『三重大学人文学部文化学科研究紀要』24,193-204  
松尾麻里(2008)「日本語ボランティアはどのような体験を通して活動を継続しているか—地域日本語学習支援の現場からー」お茶の水女子大学大学院日本語教育コース修士論文(未公刊)  
水野かほる・澤崎宏一(2006)「学校現場における静岡県立大学生のボランティア支援活動」『国際関係・比較文化研究』4(2), 241-261  
水野かほる(2007)「学校現場における日本語教育ボランティア支援活動：2 年間の取り組みの成果と課題」『国際関係・比較文化研究』6(1), 201-217

たかなし こうこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究所  
kouko\_post@yahoo.co.jp

# Consciousness of Volunteer who Supports for Foreign Children

## - PAC Analysis for the Volunteer Activities in Communities -

TAKANASHI Kouko

### Abstract

There have been various supports for increasing foreign children in Japan in recent years. Some of the volunteer organizations continue to support foreign children particularly in their local communities. In this study, I focus on the volunteer activity done by university students to provide learning support for foreign children. In particular, I conducted interviews with volunteer who was engaged in the volunteer activity for a long time.

As a result, I found that the volunteer had two consciousness, one was for children and the other was for themselves, and that she engaged in the volunteer activity while reflecting on herself in the involvement with children. Under various difficulties and anxieties, she was trying to overcome them by herself. Also, she was studying theory of volunteer and considered volunteer activity as the place of practice. She thought theory and practice were both necessary and in mutually complementary relation.

【Keywords】foreign children, volunteer organizations, Japanese language classes in local communities, PAC analysis

(Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University)